**悟りを開く方法・**

**日本に仏教が伝来する**

先月号は【**仏教の誕生・仏様の悟りについて**】執着心という苦しみの根源を手放すことで、私達は幸せを感じられる人生を生きることが出来る。という事についてご紹介させて頂きました。そこで今月号では【**仏教の悟りとは？人生の法則**】と題して、解説させて頂こうと思います。皆さまには、より仏教を身近に感じて頂ければと思っております。ではまいりましょう。

**●【「悟り」とは、原因と結果を知ること】**

さて、シャカ族という一族の王子様として生を受けた一人の青年が、「なぜ人は生きるのか？なぜ人は老いて死を迎えるのか？」という人生の根源的な問いに、一つの悟りを開かれて、周囲の人達から「仏様」と呼ばれる様になりました。その青年の名は「**ガウタマ・シッダールタ**」、パーリ語では「**ゴータマ・シッダッタ**」と言います。彼は、ご自身でも仰っていらっしゃいますが、「私は人間から仏になった」と。つまり仏教で仏様と言えば、私達人間が悟りを開いた状態のことを指して言っているわけですね。ここが他の宗教と全く違う概念になります。

他の宗教で「神様」と言えば、私達人間とは一線を画した存在として描かれますよね。「神様の仰ることは絶対だから、た

とえ自分の意にそぐわない事があったとしても、神様が仰っているのだから間違いない。神様の言うとおりに従って生きるようにしよう」といった、先生と生徒。神様と信者という構図になりますよね。でも仏教で教えるところの「仏様」と言えば、私達と何ら変わらない、執着心や煩悩を沢山抱えている人間ガウタマが、人生の真理に気づかれて仏陀となった、私達にとって先輩のような立場で、その人の地位や立場も問わず、上下貴賤の別は問われず、あくまでも同じ人間として、人生に執着心という苦しみを生み出してしまう「心」というものを具えている、あくまで同列の人間として、それぞれ皆が頑張って、仏様の境地を目指しましょうという事を強調されています。

ここが仏教と他の宗教との大きな違いでもあります。

では執着心という煩悩を無くして、どうしたらガウタマのような仏様になれるのか？というと、悟りを開いたガウタマが、煩悩を排除するための方法を事細かに教えて下さっています。そこで決めたルールをシッカリ守れたなら執着心を手放して、誰でも悟りを開いた仏様に成ることが出来ますよ。と教えて下さっています。このルールというのが、これを厳密に言えば男性には２５０ものルールが挙げられており、女性には男性よりも多い３４８のルールが取り決められています。その中でも代表的な五戒と呼ばれる５つのルールは絶対に守りましょうねと言われています。そんな五戒というのは、不殺生（ふせっしょう）・不偸盗（ふちゅうとう）・不邪淫（ふじゃいん）・不妄語（ふもうごう）・不飲酒（ふしゅいん）といった５つになります。つまり、生き物を無闇矢鱈（むやみやたら）に殺してはいけませんよ。とか、他人の物を盗まない。浮気や不倫をしない。嘘をついて人を騙さない。お酒を飲まないという５つになります。

お釈迦様は仰います。「自分の思い通りにならない人生を嘆かず、人生の基本的なルールを守ることを意識して生活していれば、いずれ煩悩に縛られなくなり、誰もが幸せに人生を過ごせますよ」というのが、ガウタマが気づいた悟りへの結論でした。

ガウタマが悟られた内容を専門的に言うと、「十二因縁」と「縁起」です。まず「十二因縁」というのは、人生の苦悩の根源を断つことによって、つまり執着を手放す事によって、苦悩を滅する事ができます。そのための１２の条件を系列化したというものです。それと「縁起」については、いわゆる『原因と結果の法則』が、一つの真理として、私達の人生には流れている事に気づかれたのです。これが仏教の基本的思想の１つとなって、人間ガウタマが、仏陀や、お釈迦様、仏様と呼ばれる聖人になったとされ、今に伝えられています。

**●【仏教は中国から日本に伝来する】**

ここまでお釈迦様についてと、悟りを開かれるまでのお話をさせて頂きました。

とは言え、理屈では分かるけど、殺生しちゃダメとか、お酒を飲んじゃダメとか、そういう事を守らなければ、人は幸せになれないというのは本当なの？という疑問が湧いてきます。

仏陀がもうけられた五戒をはじめ、２５０とか３４８とか、結構な数のルールを守りながら生活しなきゃ駄目って、結構ノルマがキツ過ぎますよね。そんな事をしなくても、正直みんな救われるべきなんじゃないの？という思いから、『大乗仏教』という教えが成立していくことになります。皆が乗れる大きな乗り物という発想から「大乗」と呼ばれる様になった仏教があります。

対して、オリジナルに近い仏教、戒律をシッカリ守りながら修行生活を志す仏教の事を「大乗」に対して「小乗仏教」と呼ばれて、両者は相容れることなく別々のルートで世界に弘まっていくことになります。

小乗仏教はインドから南方へ発展していき、現在の東南アジアと呼ばれるミャンマー・タイ・カンボジアの国々に伝わっていきました。これらの仏教を、専門的に言えば「上座部仏教」と呼ばれています。この上座部仏教の国では、厳しい戒めを守りながら、お坊さんとして出家し、一般の人達にサポートされながら修行生活を送っておられます。一方の大乗仏教は中国に伝来します。当時の中国と言えば、世界的に見ても、かなり文化の進んだ国でした。例えば船の造船技術だったり、製鉄の技術だったり、世界トップクラスの成熟具合でした。そんな文化の発展した中国に大乗仏教が受け容れられたことで、大乗仏教は一気に弘まっていくこと

　　になります。インドのサンスクリット語や、　パーリ語から、漢字に変換された中国語に翻訳されるや否や、中国国内で大乗仏教は必須教養の１つに定められて、一気にブームとなり、中国全土に弘まっていきます。中でも優秀なエリート層の中で仏教が持てはやされるようになりました。こうして中国で一気に弘まった大乗仏教は、そのブームに乗って今から約１５００年くらい前、奈良時代の日本にも仏教が伝来してくることになります。奈良時代と言えば、平城京や、聖武天皇の難波宮（なにわのみや）に都が置かれた時代です。日本に仏教を取り入れて、鎮護国家を目指そうと考えられていました。その頃の中国は、諸国から大陸文化と崇められていました。そんな中国の影響を受けて仏教を受け容れていた朝鮮半島の百済の国王が、日本への貢ぎ物として、仏教の教えが書かれたお経を贈りました。これが日本に初めて仏教が伝来した時期だったと言われています。つまり日本で最初に仏教を取り入れたのは、中国とやり取りしていた政府の役人や貴族達でした。ですので、現代の日本仏教の様に、誰しもが気軽に手に取れる書物ではありませんでした。政府の役人や貴族達というのは、一般庶民では無いエリート層の人達です。そこから、仏教のことをエリート教育の一環であると捉えられるようになります。仏教は沢山の修行と勉強を重ねる事で、悟るための方法を理解できれば、苦しみから解放されるというのが仏教であると、かなり厳格に仏教を捉えていた

ようです。奈良時代に伝わった仏教は、エ

リート層の学問というイメージが色恋

「奈良仏教」と呼ばれています。奈良仏教

は庶民とは縁遠くて、信仰することで皆

が救われるという大乗仏教特有の雰囲気

ではなかったようです。

**●【日本仏教は日本のオリジナル】**

当時の日本からしてみれば、圧倒的な先進国だった、世界の中国から文化も思想もどんどん取り入れるために、中国大陸で最盛期を迎えていた唐に使節を送り込み、得られた文化や書物などを日本に持ち帰らせて、日本に普及させるということをしておりました。いわゆる遣唐使です。そうして中国の文化に色濃く影響を受けた、天平文化が華開きました。しかしこと仏教においては、庶民の学問ではなく、エリート層の間だけで取り扱われている学問でした。そんな奈良仏教に満足できなかった僧侶が、遣唐使として登場することになります。最澄と空海は本場中国に渡って、日本に伝わっていた奈良仏教とは違う教えの仏教経典を学んで日本に持ち帰ってきたのです。こうして成立した日本仏教が天台宗と真言宗です。最澄は天台宗の開祖となり、空海は真言宗の開祖となりました最澄と空海は、平安仏教の２大巨頭と呼ばれ、その後の日本仏教に決定的な影響を与えることになります。

お２人が布教したのは、お釈迦様の教えの通りに修行すれば、誰でも仏様になれます。怠らず勤めましょうという事を庶民に伝え、ようやく一般庶民にも仏教が広まっていくことになりました。ただし、お坊さんは出家して、頭を丸坊主に丸めて、肉食妻帯はタブー視され、仏教で決められた修行を毎日怠らず勤めていくという、一般庶民には厳しい修行が課せられたような内容だったので、爆発的に仏教が広まったというよりも、仏教に興味関心のある一部の庶民の間にだけ親しまれたという程度でした。

 ということで、紙幅が尽きましたので、今月号ではここまでとなります。この続きは、ひと月おいて、二月号で解説させて頂きます。来月はお正月ということで、お正月にちなんだご挨拶をさせて頂ければと思います。今月号に続き二月号では【**南無妙法蓮華経と南無阿弥陀仏の違い**】について、解説させて頂きます。それまでどうぞ楽しみになさっていてくださいね。

**かんちゃん住職（谷川）**の

著書**「魂磨き　開運」**

全国各書店、Amazon、楽天

**真成寺**でもお買い求め頂けます。

では皆さま、良いお年を。

合掌　副住職　谷川寛敬

****

　　